

経営と健康



日本経済の父「渋沢栄一」 第二回

講師 一龍齋貞花



二〇二一年の大河ドラマは、「青天を衝け」 新型コロナウイルスの影響で前作「麒麟がくる」がずれ込んだため、第一回が二月スタート。

主人公は、日本経済の父渋沢栄一。約五〇〇企業を育て、約六〇〇の社会公共事業に関わり、九十二歳の長寿をもって大往生。経営と健康にぴったりの人。幕末から明治にかけて大きなうねりを生き抜いた人生を、ご紹介させていただきます。

「道徳経済合一節」という理念の人です。

天保十一年（一八四〇）二月武州血洗島、現在の埼玉県深谷市で、庄屋の家に生れ、養蚕の他、藍の葉を仕入れて藍玉という染料にして販売。父の市郎右衛門は、藍の葉の目利きに優れ、

栄一も父のお供をして藍葉の仕入れに。十四歳の時、父が用事のため一人で仕入れに。売り子は子どもだからと馬鹿にしていると、

「小父さん、この葉は肥料が足りなかつたね。これはシメカスを使わなかつたらう。これは乾燥が不十分じゃないか」

と、指摘され商人が驚き、栄一はまんまと上質の葉を安く仕入れ、流石幼い頃から商才に長けておりました。

五歳の頃から父から学問の手ほどきを受け、論語、孟子、大学、中庸を習い、そして隣村のいとこ尾高惇忠の許に通い、水戸学を学び尊王攘夷の精神を説かれ、剣術を大川平兵衛に神道無念流の手ほどきを受けます。

十七歳の時、領主安部撰津守の代官からお呼び出し、父が風邪で寝ていたので名代として栄一が出頭。親類の渋沢宗助も呼び出されます。

「二回面を上げい。此の度ご当家のお姫様がお興入れ遊ばすにつきお物入りである。ついてはその方達へ御用金を申しつける。渋沢宗助は千両、渋沢市郎右衛門は五百両。お目出度い御用金、名誉と心得有難くお受け致せ」

一両十万円とすると五千万円。宗助は即座にお受けしたが、

「手前は父の名代で参りましたので、帰宅して父に申し伝えの上、ご返事申し上げます」

「たわけたことを申すな。その方お上の御用を何と心得る。これしきのこと

お受け出来なくて名代がつとまるか、即刻お受け致さぬにおいては捨ておらんぞ」

しかし栄一は、「父に申し伝えた上で」と頑張り通し、

「あんなるくでもない人間が、侍というだけで大きな顔して、人の金を貰うのに威張り散らすとは、結局幕府の政が悪く、身分制度が間違っているからだ。いつかきつと見返してやる」

横っ面を張り倒したいほど腹が立つたがジツとこらえた。

翌日、市郎右衛門が御用金をお受けして収まりました。

尾高塾には長七郎に平九郎、栄一のとこ渋沢新三郎、喜作たちが集まり、家業より天下国家を論じ、農閑期に二

度江戸へ出掛けて海保章之介の塾に入り、いよいよ尊王倒幕に熱を上げ、神田お玉ヶ池の千葉道場に入って剣の修行も。

心配した父は、女房を持てば納まるだろうと、惇忠の妹千代と結婚させ、やがて女の子が生まれたが栄一の心は変わりません。

尊王攘夷から一橋の家来に

黒船が浦賀に姿を現したのが十四歳の時、井伊大老が暗殺されたのが二十一歳の時、こうした時代の中新三郎を中心とする若者たちは、尊王攘夷の先駆けとして高崎城を乗っ取り、横浜焼打ちを計画。同志は六十九人、新三郎が総大将。

親兄弟に内緒でひそかに武器を買い入れ倉庫に隠し、京都へ情勢視察に行った長七郎の帰りを待つばかり。

栄一は、必ず家業に精を出しますからと、旗上げを言わず父の了解を求めます。何かやろうとしていることを薄々察した父は、

「俺が頑張ってもう一仕事するから、行ってこい」と了承。

ところが京都から帰った長七郎が、「こればかりの人数で何が出来る。百姓一揆と片付けられてしまう」と反対。

激論を交わしたが、冷静になって考えると、三国志や里見八犬伝のようなわけにはいかぬという結論になり、目を光らせている八州取締りから逃げなければいけない。そして京都の情勢を探るためと、泣いて止める妻を振り切つて喜作と二人故郷を出奔。

以前江戸の海保塾の縁で何度も会っていた一橋慶喜の腹心平岡四郎に気に入られていたのを幸い、旅をするには通行手形が必要。

「平岡の家来と名乗ってよいぞ」と、通行手形を貰い、農民の姿じやまらずいと侍の姿となつて京都へ。お伊勢参りをしたり、諸国の志士と交際して過ごしていると、平岡から呼び出され、「幕府から君達二人が、本当に私の家来でなければ引き渡してくれと、引き渡せば牢に入れられる。助かる道は本当に一橋家の家来になることだ。慶喜公に仕える気はないか」

この時慶喜は、京都の御所を守る役

目でした。

仕官を断れば牢に入れられてしまう、仕方がないと一橋家の家来に。

二十三歳の栄一は、武士らしく篤太夫と名乗れといわれます。

二人は八畳一間の借家に、台所に盛んに鼠が出たので捕まえ、折角だからとペスト流行前とはいえ、つけ焼きにして食べた。

後年、家族には「油っこくて中々うまかった」と話されたそうです。

初任給は四石一人扶持、京都滞在中の手当てが月に四兩一分、御用詰所調方下役、庶務係の下働きです。

慶喜が政局の中心として活躍しているので仕事はいくらもある。

「渋谷、その方相国寺における西郷吉之助に、この手紙を届けて参れ」

平岡の命により西郷のところへ。軍賦役、事実上は薩摩藩京都代表。

兄斉彬が重用した西郷とあつて、島津久光は大の西郷嫌い。

西郷は人懐こく誰とでも気さくに話をする。

「おはん、この頃の幕府の政をなんと見られるか」

幕府打倒の気持ちを持った栄一は、

「ハイ、少し改まったかに見えますが、土台そのものは腐っているやに思われます」

「同感でございます。おはん一橋の家臣にしては思い切ったことを申される。どぎゃん経歴の人でござるか」

「武州の百姓の件ですが、尊王攘夷の志を有しておりますが、縁あつて平岡様のお陰で一橋家に仕官を致しました」

西郷から、イギリス艦隊と戦ったが、イギリスの兵力の強さを知り武器や機械の工場を造り、様式化を進めていると聞くと、攘夷派の指導者がイギリスと交流し西洋化を進めているとはどういうことだろう。栄一には不思議に思えてなりません。

栄一や喜作は、平岡から各藩の留守居役や公家の屋敷へ使いに使されたが、相手の動向を探るよう命ぜられたこともありました。

後の実業家渋谷とは思えない若き日の栄一ですが、一橋の家来となつたことが、慶喜の弟昭武に随行してフランスへ。パリで株式組織にふれ大きな刺激を受けるといってお話は次回のお楽しみに。